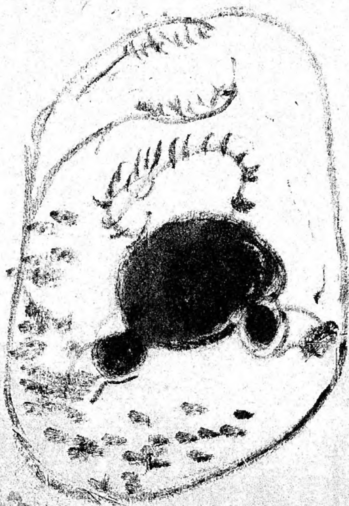
東叡山開山慈眼大師縁起

A 00
4064

部 宗
函 10
架 7 全
号 17
冊 1
記



東叡山開山慈眼大師縁起巻之上

慈眼大師 諱天海 陸奥國會津郡高田の郷に
生れ給ひ、蘆名修理大夫平盛高の
一ぞくとかや。又将軍義澄の末の御子とも
いへり。海師いまだ内に俗氏の事
人のとひしかど、氏姓も郷年もかたられ
ず。いはれしは一度受戒入ぬれば、さむかく
ことわりぞかしとて、乃給へり
茅ばかりの実ありがたかりし時、鹿ゑにて
お給ひて以ても濃むしの高僧あり

掛く立とられ給ふ程にいと苦なやみ給ひし
より酒されに給ふ事なく只管に生く
ひまには嘔吐し給ふにもやはらしめ給ふに
そのふしぎに得る比位とぞいひ奉る。しかるを
其後に終には心氣清明にして、聰敏他に
ひとしく參じて侍りいのちに給ひ給ふなし。
それよりまたも又療治にも於て後に登る
ある人によりておもてを席せる所をおく。
賤早の者なり。ひろく見せしめる思ひ
をなし心語給としてはげみ勤をなし。

まづ志なまつることとては幼学の始よりも
期頤のよはひにいたるまで給ふまでく時の
間をしばしも經書をひらき給はずといふなし
をはなはだ給ひけるに志されて遊途頑
癖のあやまりをさとり給ひしを思ふべし。
天文年中に始めて本山のかたはら学
切ゆきく神蔵寺にすみ給ふ。寶全上人
にまみえ、教観の深旨をうけ、第三世に
擢でられ、寶とせし人にあひ、倶舎性相の教
意を学び、其より南都に到り給ひて法相三

論語の論家の教法を摠て文宣王と号ひ
し著。是は神道の奥義を傳へたりける
よ。日本紀神代巻をとうて東より傳り
給ふては足利学校よりありて孔老の文をよ
み給ふて易とよくよ。首楞厳周易などいふて
給ふ。文会併ありて大寧禅師といふ人ありて
て教外別伝を発明し善恕和尚より碧巌
集をとうて。一百則の話頭を得心し給ふ。其は
甲陽の守護源晴信入道信玄。台教をとうや
まひ。山門正覚院豪盛を請し。碩学の稱あま

ねかりし。議論ありしよ。海師僧師勤め
まふ。言辨懸河のごとく玄理深淵よりし
くるへ給へは豪盛法師の辞理至つよと
感じて。恵心一流七箇三重の奥旨をゆ
るし給ふ。付嘱し給ふ。是よりて信玄の崇敬い
とありし

しかるに芦名修理大夫盛高帰依のあまりし
みづからも會津によびよせ稲荷堂の別
當になしまゐらす。盛高會津をはしめ常
陸國深澤といふ所にうつし給ふにより友なひ給
ひしに、至頼に不動院といふ寺のあ
れしを修造しこれをまかせ給ふ。文禄二年
の夏目でたく紀州までかへりしがみ
く千里の道を書留とかんだ民のうちへ
いたりてわれし。里の人くるしみて師
に申て酒はいろりに移ひしに師また

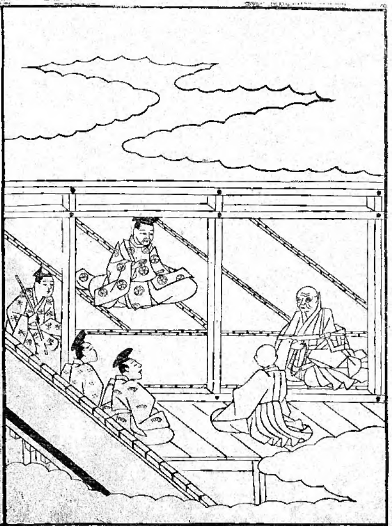
あつち江潭にいそぎ修法しけるに女一人
女龍とおもく来り見えて加持し給へと
こふ。禅師ありあはれみて給ふにより海江潭
にのぞみ請雨の法を修し。仏舎利一粒
を龍華に乗て水の上にうかべ給へるに。
水中より青蛇いでゝきて。舎利をとり無
くなりぬ時のまに黒雲立ちまなこ
うみとしうなりぬれば驟雨しきりて大雨洪
に随て後ゞ猶輪袈裟もなくして百穀を
のりうつくしくそのあまれますさ人ものちに無

なりその女の行末をいづくとしらずこぼれ
着もちたる人なりけるとぞ。その女龍は
今に蜀山の霊窟に住む

慶長四年。武州仙波喜多院に入寺しおはし
とせり程もなく給ふて同八年に下野長
沼宗光寺といふ寺に移り給ひけるし
十二年。叡岳乃院中所々路らいで統て
争論に及びしかハ　東照大権現より
乃府城にまし〳〵あるに権僧正豪盛と
いふの前として院徒あるによりてきそ
うけ参へあり　神君理非をしめし且け
させ給ひて。悪徒をば山を追ひ給ひ
て其後に関東乃門徒を統べ僧を撰

ひはうあへしと。施薬院入道宗伯に仰
ありし程されハ。彼寺のいらか頽破の人〳〵を
撰しに長澤宗光ら権僧正天海と智
行兼備の人なりとて人〳〵申せしハ。とゞ
いら山門本院南谷南光坊にすへてんとはく
めさせ給へハ。宗伯天海を駿府にめしまゐ
らせしに　神君御対面ありて仰させける。
はしめて謁見し給ひしとぞこの山のことを
まかせん。汝にあつけし。武州河越の住
とり。仙波喜多院ハ東國めくくハ寺家

無雙の檀林のよし仰ありてそこし有
御諚せは我の寺ともまをしてんと花也
兎角を申さすまいてん。さすが山のかたの叡山
の学侶をとゞめ給ふへし。年ちかく経て有。
かくなれハくらり給へと。乃給させける。
宿世の御契りめでたく。かくの御対面よ。
ろくり給ひけるこそ。不思議なれど人〳〵
いひあへり。はたして山よの日うり。住給へるよ。
山僧なる。田舎の僧正ハ。准宮なれハ叡山の
法印僧都よおほしけるが。同法ありせ



申しけるハ智樂房と以ふ家門乃標号を給
はり。尚々ひ精修心有信し給ふ偏に
小國大臣秉綱大國失本位次乃道理に
昔人ハ作をしてこそ修しれめ哥修行ふ
ゆめにに以せまのしくたりして。一點禪心山
螢雪して。寂寥を照さしんらもなく
なりく朝夕の煙をたつるよすがもなくして。
いとまもしくおちしけるに。宗衡そ三衣の
かたみとまざなひ一鉢乃むけしきおり
もとく沙汰してまゆまいとつきなれ

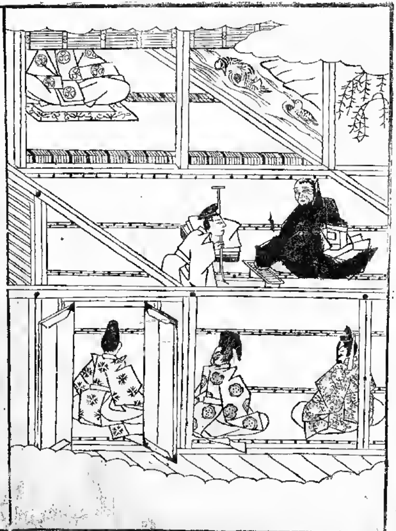
年月をかさね山にすみ給ひけり。
神君より下給ふ亀さよし。宗伯に給ひあり
しかれども登山して御内意の旨給
へしに海師の給ふハ叡山と三井寺山とは
いへども宗の根本にして一乗弘通の霊
場なれバ叡山に帰りてちかひし夷
狄の地ありとみ今晩年に及び幸に中山
に来り今もかくして終を遂んのこゝろ
ざしをもちたれ。駿府にかくも　神君の
給ひけるに付て再度東のかたへハ亀

らしその給ふ宗伯なるハ仍り給ふハことわり
にかれど　神君ハ佛の道にたいそうふかく
いづれの宗の法文をもきこし召給ふ台家
仏法をきこしめし御心を叡宗によせさせ給
ひ宗門の繁栄をおぼしめされにけるにや
なり給へ叡山をつくりたまふにあり給ひ
道の御供つかまつりてハ世給へとあらし
うれざると思してバかり給ひとの
給ふ宗伯道をうしのぞみを沙汰しける
くかの駿城に参給ふ　神君やがて御

對面ありていとしたしみかたらせ給ひてとゞめ
おかせ給ひてしばし跡を移し河越よりくらハ
仙波の薬寺みなくれんやくうのちまで給
へるの給へと廣くさとりの府と定て武藏よ
至り大樹秀忠公にまみえ奉りて
仙波の喜多院に入寺し給ひけれど
なく縁坊よりおり給ひしに御敬寵日々
ましく。あさゆふなれ給ひ。俗
諦常住の法文を説るなり。三千三
觀の源をきハめ給ひて御始祖より以來

九代まての淨土乃宗をあらためて台家に
帰し給ひ。山王一實乃神道ならひ奥義を
きハめさらにまたふかく御そう乃さうそんを
まもらんとちかひせ給ふ

然れし十四年。山門にして法華の大会をと
りおこなふ座をさだめあり。志す所よ探題ハ清撰
の職なれハ、その仁にあらざれバがたし。よって海師ハ
宏才博覧の人なれハ、その外推さハ御ゆるしん。蓋
の額の御印を給らせと。山より度く
神君へ申し入れいとゝ御給ひてより給ひ
宣職の勅許をたまはり。新題者の精義厳
許よぞしとめ給へり　上皇　後陽成院　度く免
しまして。法文をきかせ給ひけり。世にも出て給ふ
くゆ御とゞめつることゝせ給ひ杖およびの法服



一燕尾の帽巾ハ給ハせ給ふ帝ハ我まん、
めぐくをぬく華あらし乞のあゆミあへるこ
うんしまあうちさき雲上にも沾枝をくべ
しとの給ひあれバこそ毘沙門
雲井門宮にも給ふ宸翰を下され讃偈
正統偈じまよ任じ給へり

沙門

おなじ十七年　神君ふたゝび西河羅に
狩に赴かせ給ひしより御言葉ありて
うつくしく仮殿よりましく勝給ふ寺の住寺
丹羽ゆゑ本堂手に掛けて人に遠ざかるもの有
てかゝる紀奮ちなりかくして一宗
の草堂あり黄竜破月桃常修之院ともいふ
見えたり本尊ハ弥陀如来の尊像にて安置
されしを運慶の妙作を写し給へり
空八のね好色好よろしからず役行者に深くして
後嘆る御殿の袖有りあまりとあふ云々八雲

寺役を給りんとしてあまりの縄みじかく手綱
らちなく世給ひあくみつくさよ作せよくぞあら
くはらく世給ひ荘蘭被りくらせ世さ世給よ
本堂の本尊ハ寺より永く住せしを利益いよ
強くなるやうに浄然とも色く薬師仏を
安置しをべきよし給まはるその頃り頭ひ
ようく申しつかり給ひて御本地薬師
よて給ることを不思儀なれ

下野国日光山は神護景雲元年に勝道
謙師始て分入給ひしより慈覚弘法
両大師相続きて梵刹をたて仏像を
彫刻し給ふ然るに二荒山の秋の月は霧
長閑の色みちをてらし標茅原の朝ぼら
露は消しも草の末葉とうるほひ目出た
かりしくかゝる舊跡寺なりしかども中
比より僧徒の法みだれて仏法衰微し
僧中にも俗意をもつて確執ありければ
神君これを聞しめし衆頂を遮撥し給ふべく

慶長十八年彼山を海師にあたへ給ふ。禪
林結座をひらく。荒しをさかやかんとて
元和二年の卯月の十日あまりより。神君
御つゝが給ひしより。病床ちかく海師を
めし。法華止觀の深義。山王神道の玄旨を
以てよくきこしめし給ひて。のたまひけるは。我久しく天
下を掌に握り。世を嗣子に授けつ。よはひ七
旬にあまれり。何事をかこのうへにのぞまん。
我山王一實の神道をもて子孫の延久をねがふ
をおもへり。偏に海師の厚恩難じ

なし。我歿後は。大織冠は藤氏の宗廟
にして。今にいたるまでさかへ給へり。鎌足攝
津の國阿威に葬りて。一回をへて。多武峯
に遷殯せしむる。彼例によりまいらせて紀
うつし奉り。久能山にをさめ。一回して日光山に
遷殯あるべしと。こまかく海師にのたまはせらる
く。かくて薨せさせ給ひしに。南禪寺僧崇
傳和尚とゝもに。本多上野介正純とゝ
らひ。吉田の唐流にて宗源の神道を學びし
者とも我わたくせし。唯一の化義にて。久能山に

ゑんなり。海師とおほせつけさせ給ひしぜん。さ
かくておはしましけるにあくるの日　大樹お給
ひ。御病床に伏しくくに御對面ありける。
海師ハ左方の座上につき。崇傳ハ右方の座の
上にありしが。ほどなくおほせには利傳あれば追悼
の旨をのべて御遺言によらん。はず久しく禮
山王葬送なり給ふとおほせは海師もとくみ
お御遺言ハいかがかみなるてあらせ給ふと
ありしかば。それはよへしてかつもりとや
うらどりあされ給ふ。ふうり御遺言によるら

うひ給ふやとひとしく。御遺言ハ山王一實
の習合神道にこそ候ゑ。又ハ宗源なざ
しめしおかれ給ふともありしかば。亡君を
國常立神のまつるめしと見えて。神ハいふそれ
給ふとの御心ならず。さるあはでん。唯一ハいふひ
給ふんなあらん。御遺言とよるかりんといへり。
海の給ひハ　亡君あさ夕の御心ハ御おぼし
めしらん事と。称ひ給へり。彼神なぞく
はかのあくらん亡骸し給ふハあさなきいませ
給へり。志るなり。このかし先例と云く事

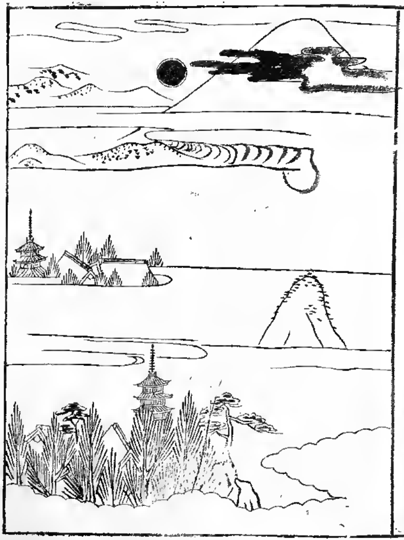
當家(たうけ)をはじめ、かの宗源(そうげん)をも習合(しふがふ)
させしかば、かれと問答(もんだふ)数遍(すへん)ありし所、
上野介(かうづけのすけ)かならず御沙汰あるべしとて御家傳(ごかしやう)
の相(あひ)かへりて事(こと)かおせうとゞかれとぞありし。
東光坊(とうくわうばう)などいへるもさき達(だつ)よりあがりてんとく。
座(ざ)をも得(え)きまれば、柳営(りうえい)をやうやう入給ふ。
絵師(ゑし)は座(ざ)をまてられて達流(たつりう)をたてわたり
しられ給ひしより。柳営(りうえい)御城(ぐじやう)よりくらせ給ふ
とて一日(ひとひ)かへん傳記(きやうじやう)と宗傳(そうでん)と問答(もんだふ)せらるゝ。
ゆゑかきのかしく傳心御江戸(えど)にまいるべしとそありし

めさんとありしかど、ぜひなくあひてあらそひ給ひし
より、かの座(ざ)者(おう)さ海とらせ給ひしかれば紫衣(しえ)を
の許(ゆるし)もありたまひしより。大樹(たいじゆ)御上意の是(これ)
愚昧(ぐまい)なれども禅宗(ぜんしう)のすゝめさへありて僧をゆづりとど
故桐谷(こしやうこく)ハ仏(ほとけ)の道(みち)まんを入させ給ひてから衆生(しゆじやう)を仏(ほとけ)
と。一の道(ひとつのみち)あらざれども、亡親(ぼうしん)の御心(みこころ)よ
かなひしとしてはなれざれば。関東(くわんとう)へ
くんとして源氏宮(みなもとのうぢみや)家筋にて御使(つかひ)として林永喜(りんえいき)也
何ゆゑか儒学(じゆがく)の者をえらひへ傳心ありし給
ひらく参(さん)せし也(なり)。習合(しふがふ)の形(ゑ)をあらためし

らを殊よ山王一実の神道台家の奥義ハ
もろもろの仏たちの倫言まて獨悟なし
聞記をし賜りて世給ふ意の旨深くヘアつり
し給。大樹悦ハせ給ふて限なし。積ミて一回よ
も及ばざる竹を日光山よ移しなりて
東照大権現乃神号諡賜ひて山王習合の秘海そ祝ひそめ
なり給ひて其より御忌の度ごとに御法事。
凡そよそおこなはせ給ふにも海師は導師
行幸の御延も厳よつとめ擁護なれハ
と結縁言参議着座して御導師よりはじめ

ゟ給ひ厳重なれハそのかミ御忌の度毎に勅
使ありけり。故又　将軍秀忠公も　神君より
をとらせ給ひ優寵し給ひて元和元年の御上洛
にも従ハせ給ひける。　院のみかとハ　先帝正親町院
二十文乃御恵忌なれバ御経かゝせ給ひ釈迦
仏賛御判ありて海師乃よりて給ふを
これもてなし給ひいとうれしとの給ひ院中にして
て御法事をとりおこなはせ給ふに海師を導師として
しかせ給ひて大僧正となりたまへれ
ましたまひける

同じ年の夏比、日光山　東照神廟の奥院
のかたはらに　神君忠勤の人々の骨
霊をおさめんとて地を引給ふに。除地ありしに
ある所に仏像ありとて巌石を掘らせ
しくかば。丈寸許の金銅の地蔵菩薩一軀掘
出せり。今妙見院の霊内に安置せり。さて
藤原正成（後改隼人正）とよろしく　神君の近侍なり
しを、尾張の亜相義直卿へ付させ給しに、
生涯も忠勤をはげみつつへけるに日比
孫ひさしくはつかへまれど死後には　若殿の



御ことつてに侍らんといひしかバなきを
きゝて。義直の猶子の孫をそへしるしゆい
ごんげんハ日光山に死骸をくらまされ
けいまさに死せずして三日まへに。海の絵ひろめ
ごんげん神詞にまつらるゝに正成にてに来りて
神君の御前に侍しとみはつたりし正成
この時まさしくぬしも何やうそてに
来らんにしあられぬを侍るとして。禄をまく
しきあへ里

元和元年海師上京し給ふ　先帝第
三回の聖忌九月なりけるよりあひ給ふ
に　上きこしめされ給ひ海と御寺師もて
七日がほど清涼殿にして法華懺法を
とりおこなはせ給ふ。　上おはしまして御聴聞の
威儀とゝのほりしくはしくめでたき給ふ右大臣
近衛殿信尋公をはじめ公卿達座に列りたまふ
御寺師の行を勤め給ひ給ふ織の
御かゝりのしくおもしろく聞えし宿香のかをり
みちくわゝりて十方界にも遍満すべき

叡の御回向しおはしまして悲嘆声の
音曲のはしきまうくとどみをかへりそへゝん
さらに結業の縁の君もしきみや
かよ。六根懺悔の御日あひしけり光猪
四かん雲もとゞろかしめられ給ふ繍経のやう
風ありとしひぬるかし

東叡山寛永寺慈眼大師縁起巻下

寛永元年　秀忠公仰ありさバ先考既に天台の宗家に帰し給ひて。猶かつくも城邉にあるべき練若を開き給へとて江城の東北にいとひろき地を給はり。ちくなむしはらり給ふ。比叡王城の鬼門をまもるによそへて東叡山と号しつ。息災安全殊に　大樹のうへ天下泰平をいのり給ふ。御むまこの将軍　家光公ハ宗廟とあがめ給ふる。いませすがうくし給へは。

祖神の御心にかなはせ。海と師と號さ
せ給ひて。台教をうやまひ。慈恵法楼一心
頓円速疾三観せる。一心三観の血脈を受
給ひける。それよりよく海師の徳名
天が下よあまねく。諸宗の碩徳もまと
なり勝をうくあいたり　上野
二品守澄親王　繦褓の間より。東福門院やしな
育せらるゝあくし給ふと。大しものはくり
らひあく。日光山の門主あり。うけさせた
まひ。海師の御でしとなし沙汰し手あり

ならびなくなれることありける御作也。
度をはなる僧は。あまたなん侍なれ
あり。常随の弟子は。大僧正公海。僧正
晃海。権僧正亮海。法印大僧都堯海。亦
余たあまた有

海師所のうぐ。叡岳東坂本より登る。山の
腰の道に法勝寺の旧号をとゞめし寺つ
らり給ひける。今号志賀院そのかみのころかん
山なり　東照の御社を造営し給ふ。その
よそほひ。棟梁に金玉をちりばめ。綾
くやう。府の壮麗もいちじるしく。西
面は後の山ぐらの山桜に志賀の
都路をも打渡しさゞなみの浪花の
うみは鏡立なして粟津の茶しり。東
まれなり。ゆく人その勢多の橋をしく

よみえ。東は鳴乃浦くおりうく湊ぶ
しの遠山もけさやうにみゆ。多ゐる月
影をうく。鏡の山ものぼるだうら
まちうくみて。小松吹風の声くさゝ。
かりふたる程の里ちりく。妻ふ庵乃跡
をとゞさ。雲井の鳴け鳴く〳〵る。栗田
の浦よ引わたのめかもく里ゝくもれ
ぞしられもちく。白雪の膝ばかり
みる比良のきりねふさかくしくみて
無きみしね。景地なり。寛永十一年

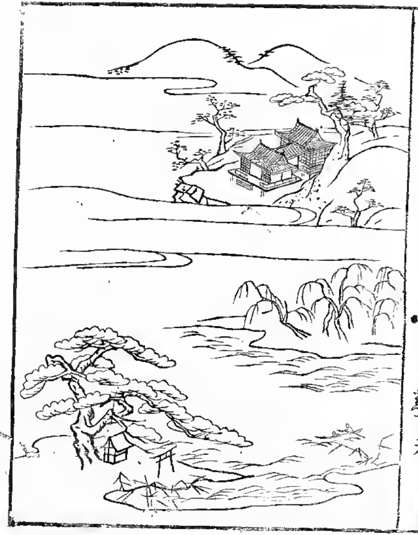
大樹の上洛よ従ひ上京のついてよ　勅許
をうかゞひ神社勧請の儀式おこなはれまし
ハ。勅使官幣をさゝげ宣命をよみあげて
ゐやしくそ額月ゝ落慶ありしとなむ給し
ぬ。山の御門跡寺庵よ住しなり給ひけれ
ハ大威どの〳〵別庵してそのしるしわひ嚴
重なり　大樹家光公より二百石の地
を寄附としてよせさせ給へり。檄又上野
國新田庄世良田山長楽寺ハ台密禅三宗
弘通の梵刹なり。新田法川乃墳墓あん

地なりと見へしも頂住僧唖羊僧有りて。
堂舎零落し荒廃の地となれり。神
君御先祖の廟塔なるもらく荒草の
こまく茂と埋とたてまつるを仰ける世継
ともに住僧さだまらずしもなけれども
とうせ給ひしより邪曲の事詐へ
乃代華と號し逆撥し給ふく海師ハ
そのうへ彼ちの付法のともがらさへも
しかりしかのみならず三宗道学派の外
天が下あまねくれかハおもへども是海師よ

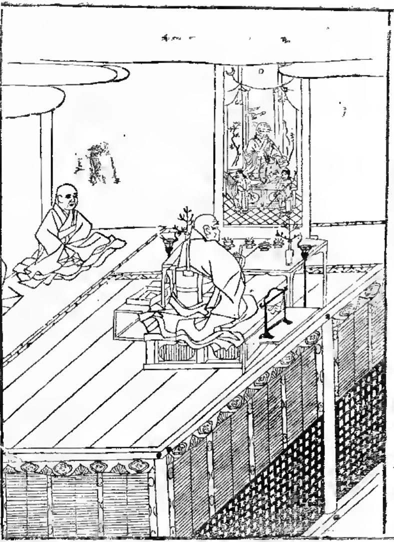
賜へされど海なるものをはぬぞぬ牟
性ふくぞれりえもふあろしよ。神君
薨去ならせ給ひぬるまはとくして年比あね。
さて 家光公へ此旨仰ゝりて寺詰記
ひもてばしりすよ。寺僧中なるハされし長
楽寺ハ開山栄朝禅師ゆく唯禅の宗な
共海の住持なりしと称へしも海乃給
ひろハものちハ葉上一流の伝法灌頂今
よ靴りしぞの末寺ども数多く伝へハ
秘密灌頂の道場といふなり。誰かこれを随ぞ

むや。又貧道院ニ大寧禅師并ニ宣海
和尚より。宗綱一流の単伝密印の付法
印可の血脈を受ありしの経へは。
大樹にもしめし給ひしをあれ祖神の賜
とせられハ。とかくの事ハ非に沙汰せんと
乃給ひく。海師よりよくかまわせ給ひく。
侍従忠秋ニ（阿部豊後守）給く。什物よりのこるま
てうらしく渡させける。堂塔破壊しあ
まづ法堂を修復し　東照神祠を造営
し。多宝塔方丈厨屋あまたありて
まことにあれむ。御神供料として。
大樹より二百石の地をよせあたへ給ふ
ことにめでたく世を給ふ近年頽破
せし堂塔もとのごとくに造営
の霊場となれり

寛永十七年の比かとよ　大樹御所よ申させね
事ありて申させ給ひつゝ。令嗣御誕生と
海師に給て祈らせ給ふ隣列よいゆ慈恵
大師の尊像いつもしてえたりけるの御前
まて男君平産とあらんと思ひ給ひし隣列
あの海城を得度藏京之又也ねる虎ちら。
師壇の契りふかうされは。令嗣平産の祈のため護
像下情の旨の給へいつと安らするにそ夜と日に
しそとひつゝりつよ精ろくおこまさ給ふせまうら
東叡の道場に安置して　いのらせ給ふ



又日光山　東照の神あらはし給ふ新宮
の祠中にめでたく丹精をつくし給ふによばくたい
のこがね白かねのみの札一枚海師にたまはる
つるよ給りがたくよろこびて給へる便
生福徳智恵之男の経文なりとなりつゝ
悉地をうしと思ひ給ひ礼拝して神前を
まかりでし給ふ八月三日の夜の夢に権現
御心よげよりあらはせ給ひ白き鶴をん
むなひとつゝいでさせ給ふて海奉法求し物
えさなきとてくださりける夏になりぬ海

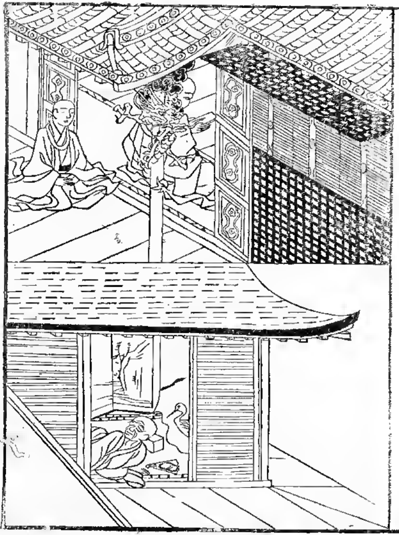


ねきあかりくださらずたく。頃 今嗣平
うしむとひとり忠をしたまふ。きのこのちお原
正盛 中根氏 御供より御供をめされ。二日三日さ
登山してありしよ。その前御葬
の額ひとそ酒さするをとられしが。正盛ん
ぶんなりしがは月出度待ちと申して酒そて
くへの給とあまりしかねさやうなみ給ひ
最の御声ももち年寿今なをやおしまれ
とう給ひしが正盛はなうしてまこ下山
ましよて御縦御殿の御役として

源家之 文緑 よりあひせる主旨 大樹より
おもきはいよく信給ひやまし給ひある。
さて御そぶやしるひめもぢ川御師を
めしもの百年のしらひせば幽君よりゆづり
なしらんといひてまかて、竹千代丸の御ゆき
らるを付なり給へるとも

海げつひ給ふ度毎に老臣藤原忠勝 酒井讃岐守
紀正盛 堀田加賀守 源信綱 松平伊豆守 阿部忠秋
豊後守 同重次 対馬守 等の執権の家臣と
もしめ中根丈峨の手習の人々と院門よ
付まうせ給ひしに名をとどめてそ
しるし残すなるつせ給ふ或時近臣
正盛作言とうまゝくろせんじうて海
御とハ 祖神大権現世よいまもぐてよくれ
ばとれハいふかりて久しかうんやう有
よの御祈ひよ待るに御所ぞきこえて

大佛



おもひて御ものがたりまで喜悦とぞきこえさせ給ふよしの
給ありといへる消息ありて寛永廿年の秋のはじ
めつかたより御悩み給へは大樹へ聞こし給ひて
御医つかはし湯薬などまゐらせ給ひけれども
給へり日数ふるまゝに御心のをもくなりまさり給
ひて終に百丈へせ給ひて今はの名残つきせぬ
おしませ給ひていまさらのやうにとぞ思ひ
さんとて侍従忠秋をは使として君の上をもとめ
狩野法眼探幽といふ絵師に仰て尊像をうつさせ
給ふ御寿像に御讃を入させ給へり

十月朔日の夜、御でいみどもしよりいひおけりぬかんそく。
をりしん殿の令法久住のさまそれぞれの給
ひ。大樹への御ゆいごんありしかせ給ひぬれど
海足よりね三日の朔日とあるひ。安陀
會を着し念珠を持しろうけさせ給ひ
し書籍と二三紙の類見給ひ文殊の影向を拝
し端坐合掌し称名ろがくく入寂し給
ふ。目の前にたる色さまさしも。容顔いき
ながらく色わひるがふ事なし。大樹
ふかくめでさせ給ふ御心の御衿裳み親

よせられしがころし七日が程御さうだんありて
て将なんとめを出させ給ひて果つまで
のあそびもとぐまりぬ。遺言ありしま
うせ日光山へおくりまゐる。大樹の給ふ
より旗鉾のさまをもらし紀国の武士を
東照宮神事の儀式よろしからんとて
せ給ふ。中陰はあまり。日光にて。室方よ
り法事おこりけせ給ふ。残り日数を藩國
山めぐり給ひぬ。真言書宗より。西地の
四ケ寺。禅は大徳寺の沢庵和尚。浄土宗よ

増上寺をはじめて浄宗の碩徳僧集来
し。諷経をなしあまる。又うつさせ給ひし新
像を月毎の二日にはつゞかせ給ひ侍く。御
まうしありて名香を焼かしめなし給ふ。且
光明山に霊堂をつくらせ給ふて忌辰の
斎会をおこなはせ給ふ。第三回忌に
は南山新堂にまして給ひ御落飾般到
によみ給へり。名をおくらせて慈眼大師の謚号の
詔勅下し給ふ。大樹限りなく悦び給ひ。
弟子をもれなくめし。謚号の勅許あ

りかく思召て大僧正になさせおはしましけるとぞ。
ゐ給ひけり。又悦びたまひ給ひつくりたる
をもつてやすらせ給ふ。よつて僧衆をもつて
きたる椒寺七回忌にも南寺にて要営へせ
給ひしより年月あれど猶御神にも祭り給
ふを法会の新会も例のごとく営。柳
営よりも猶とりせ給ひ殊に延宝二年
十月二日は三十三回の年忌によりあるに例
の公方よりも勅会とさるれ。目光山霊堂へ
御代参として源長定 小笠原丹後守 参まりて妙経

天が下の和哥を勧進し給ふよ。
守澄親王御口入により　新院御製の
継天ハ多かりけれハ摂政の大臣の作並
ハ随にを加へ当時和哥の達人月輪前関白
武家の人ゝまで悉く詠をたてまつり
是ける継天は日光廟堂にて奉納し
たまひぬ

されば天台の宗門は世に陵遅して。
名をしる人もまれなりけり。まことにかく
知る人をもえらびおもひたのみしかども
もろびとさらに山伏座頭のたぐひ有。
思ひすてし。慈海師が強く宗家の繁
昌を図るとし年ごろよりねがひ。台家中
興せん大師ときを作る。文をみて字の後
記り作れ。大意をとらしよへかうし。
顯本郷神社考といふ。新書を見ける。
僭層天海及松雪者遇残夢々好枸

杞飲食之論亦喫之與人語曰残夢長生
不遠事而服枸杞故也。人嘲之曰彼蓋常
陸房耶。海聞而喜之。人送枸杞海受為
菜飯餌焉。海之言曰任意隨時。勿急
勿速緩々慢々是延壽令人或信之嗚呼
詭層妖惑之弊無所不至矣。これ鄉の曲
儒の謗言にて。いふにたらず。予幼稚の
ときより海師のそばにありて。朝餐
暮飲をともにし。くはしくことをしるといへども事
なし。ゆめ／＼枸杞飯を好み給ふ事なし

要く飲食何の好禁もなく人のわすつる
にまゐらせくすゝめ給へり且よく人の得た
もの枸杞飯を賜はりしを服せしめ給ひ
着まうしてさし物語し給ふつるに蔵
夢長生あして夢よ此飯を好みたまし。あさ
まで給ふみなや。蔵夢ゝ云よしなまく。好む飯
給へるもの。ふる給ひしを枸杞ん。や枸杞を心
氣を壮ふし。五勞七傷を補ふをうとても。醫
書みもいわれ心氣ハ人の根源なり。其源を
調ふれバ其後命をくし。天命を盡さん事。

僻事といへらし。隱士ハ唐の陸龜蒙
ハ杞菊を食して精神を頤養せしといひ
て。杞菊の賦を作りて聖賢のよみもの。なぐ
く養生のならひなれバ禮記にも。爲此春酒
以介眉壽といひ。周書よハ。稱五福壽爲先と
説孔子も仁者ハ壽しとの給へり。其外ひ
壽をたもりけり。聖賢乃たぐひもいふ事
よハ侍らじ。又我たまりぬれバ蔵夢が長生も
稱國のみを取なりれバなりとも枸杞にをよ
らし。されバ枸杞ハ心氣を補して長生の助

縁とられハ鞠花よりうさるゝとしれぬなん死
皇食物の縁よりくるとハるゞ其の神農
草とを嘗百草を設くるしあ。凡そ民を
せまる者百穀而養其生者百草而治其病也
こもなれさ徒く天壽福福られみなかるあ者乃
蒙因人のよくもうかねするねを錬人か称う
はらん只はらに接くあ西ハ海師のなし心を禁
皇漢武の長生をしさはりしよ論をうるあや。
道家の除穀餌丹して尸解羽化をいうを
とは西天九十五種の外道の中にも有なりと。

飛伸破しなひ。震旦にもさりけるを
を破せられさるにハ牟子論よハ神仙之書
大道之所不取。無為之所不貴と記し。
劉勰滅惑論にも、假使形翻無際神暗
鶩飛戻天寧免為鳥と書せられ。そのほか
笑道論二教論等を始。諸師の説。他に
とさみせし事。しくくよ彼道ハ傳書を閲
せられたるにハ庸学といふを。これを知
らさる事なし。況海師よをけるやうの
此秘書をも博く讀ませられさるにてもみべし

いとゞ私欲にひかれて。實理を暁め
ざるべし。又彼蓋常陸房那海闍而
喜之と云つるり。残夢を常陸房といひ
し。海師ハともに名を敦ひ給ふ鳥も悲して。
利害の為の事にはあらて。また欲ひいゝら
のすきハ此師の胸心にかいもれハ。況理に
徳ぜざる事あらんぞ。しかしこそんや。又師の
任意随時勿急勿速緩を慢くとの給ふ
るを記とり。此詞ハ褒言ともいえん。貶詞と
やいふん。聖賢の心術ハ寛裕温柔をもいひ。

或ハ君子ハ坦蕩々といひ。無欲速とも説給ひ
しハ。勿速勿急緩を慢くとの給ふは異事
なりや。何ぞこれハ褒詞めとも覚えてうさるし
思ヘハ。嗚呼海尊夭惑無所不至と作るもの。
此一段褒貶兼雑して錚楷分ちがたくして。
慢を是延壽と云つる人のゆえや依ざれ
バとて海尊が夭惑といへるも。理を不盡
なり。道に迷ふ程にて聖のせんにあらめ
作れ孔子春秋の筆法をかりたる事とも
いふべきか。聖賢の言をほゞ誦して。

理はちう託すや侍らん。彼着天桂香春
多欲ありて丸愚乃人のさ数くなりし事
八十年に及ばれたるなれどもそのようなれ
侍りしも彼が謗言ありけるればは筆にま
かせてく記し侍る

余輩自幼侍師之座下。而自不相追隨怡如形影之相從。然故其舊勲積德取取識之者。而作其傳癸亥已前之事跡者。亡父宗伯取悉識之者也。仍詳誌之垂不朽世言先師之異行者。往々有異于與實者。只以此記可為證而已

慈眼末房僧正胤海記

此兩 大師御緣起者東叡山雖為
祕鑑之靈書蒙御 免許奉繡梓流

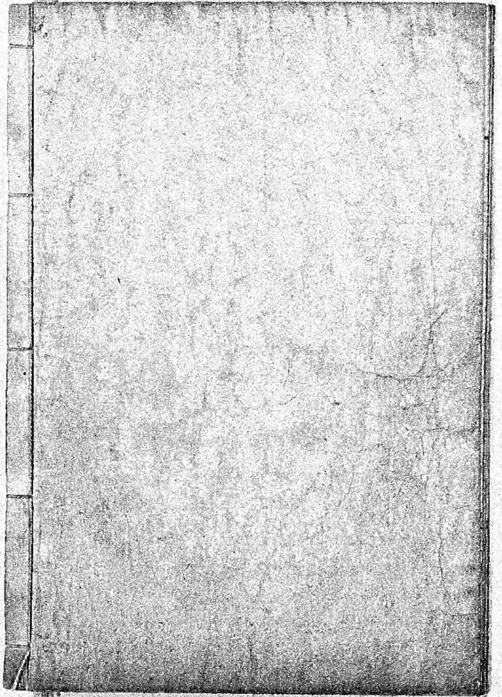
布于世間者也於他邦不可有類板
之旨仕　嚴命加與書畢

延寶八年龍集庚申仲冬穀旦

江戸通本町三町目
村上嘉右衛門
同　善兵衛　刊行

沙門雄賢

沙門雄賢

慈眼大師縁起一巻於下谷書鋪收得價百錢
文化十二年乙亥孟夏翻杏花園

旋峯院入道宗伯子借正藏海所著慈眼大師縁起
一覧　文化十二年乙亥夏四月十七日請君於緇林樓上
共觀一讀ス時滂雨潤物是日也於日光山有
大權現二百年齋會云
大田覃